

戦前期における軽井沢別荘地と洋風別荘の変容に関する研究

主査 内田 青蔵*¹

委員 藤谷 陽悦*² , 山形 政昭*³

本稿では、わが国最初期の別荘地である軽井沢について、その別荘地としての変容過程を地図をもとに明らかにし、加えて、洋風別荘を積極的に導入した建築会社あめりか屋とヴォーリス建築事務所の軽井沢進出について報告している。すなわち、軽井沢の別荘地としての変容の過程は、外国人中心の自然発生的な別荘地としての第1期（1886-1915年）、日本人の別荘地として企業が開発に乗り出した第2期（1916-1929年）、南が丘に別荘地が拡大した第3期（1930-1945年）に区分できること、また、第2期の別荘地開発にあめりか屋・ヴォーリス建築事務所が積極的に参入し洋風別荘の普及の契機となったことを明らかにした。

キーワード：軽井沢，別荘地，野沢組，洋風別荘，あめりか屋，ヴォーリス建築事務所

A STUDY ON THE ANALYSING TRANSFORMATION PROCESS OF WESTERN COTTAGE AND RESORT AREAS AT KARUIZAWA

Ch. Seizo Uchida

Mem. Youetu Hujiya and Masaaki Yamagata

This report clarifies that the growth of early modern resort areas at Karuizawa in Japan consists of three periods. At first, the resort grew naturally with foreigners cottages (1886-1915). During the next period, some companies developed residential areas with cottages for Japanese habitants (1916-1929). Finally, the whole area of resort extended to Minamigaoka (1930-1945). For the analysis, many maps in those days are used. And it would be also clarified that western cottages become more popular at Karuizawa after America-ya and W. M. Vories & Company Architects positively participated in developments at the second period.

1.はじめに

軽井沢の別荘建築は大正期のものでさえ築80年程を数え、維持や管理の問題もあって急速にその姿を消しつつある^{#1}。また、当時の生活の様子を知る住人も極めて少なくなった。その意味で、軽井沢研究やわが国の別荘地あるいは別荘建築の歴史の蓄積のために、わが国最初期の別荘地としての軽井沢の総合的な研究が急がれる。

ところで、これまでの軽井沢の別荘地としての開発史や別荘建築史は文献資料の制約もあって、近年、新に聞き取り調査に基づく新しい研究も見られる^{#2}。ただ、このような方法においても軽井沢地区が別荘地としてどのように変貌してきたのかを十分解明しているとはいえない。そのため、新たな資料の発見・収集の努力はもちろん、これまでの資料の見直しや資料の新しい解釈といった研究も大いに必要と考えられる。

そこで本研究では、明治期から戦前期の軽井沢における別荘地開発の経過を具体的かつ客観的に把握し得る方

法として、これまであまり注目されなかった古地図を基礎資料として別荘地開発の様相の解明を試みることを目的とした。この方法によれば、地図には道路の開削状況と別荘の存在状況が記されているため、軽井沢地域の面的な開発の様子を具体的に知ることができるのである。また、大正期以降の民間企業の主導による別荘地開発や別荘建築の建設は、今日の軽井沢別荘地の基本的骨格を造り上げたといわれているものの、これらも資料的制約からその状況が十分に明らかにされていない。そこで、土地分譲事業を展開した企業として野沢組、建築会社としてあめりか屋、ヴォーリス建築事務所を取り上げ、軽井沢での活動内容を改めて整理し、新たな知見を加えることにした^{#3}。

2.地図からみた「軽井沢」の別荘地としての開発経緯

2.1 資料とする各古地図の概要

ここで扱う軽井沢とは、今日いうところの「旧軽井沢」、

*1文化女子大学 教授

*2日本大学 助教授

*3大阪芸術大学 教授

表2-1 地図リスト

| | 名称 | 発行年 |
|------|-----------------------|-------------------------------|
| 地図1 | 信州軽井沢之全景 | 明治34 (1899) 年 |
| 地図2 | 長野県信濃国軽井沢郵便局市内 郵便 区画図 | 明治44 (1911) 年 (推定) |
| 地図3 | 軽井沢別荘分布図 | 明治44 (1911) 年 (推定) |
| 地図4 | 軽井沢別荘地案内図 | 大正6 (1917) 年 (推定) |
| 地図5 | 軽井沢別荘案内図 | 大正11 (1922) 年 |
| 地図6 | 軽井沢別荘案内図 | 大正11 (1922) 年 (推定) |
| 地図7 | 軽井沢地図 | 大正15 (1926) 年 |
| 地図8 | MAP OF KARUIZAWA | 昭和4 (1929) 年前後 (推定) |
| 地図9 | 「軽井沢ナショナルトラスト」所蔵地図 | 昭和4 (1929) 年 (推定) |
| 地図10 | 軽井沢地図 | 昭和5 (1930) 年 |
| 地図11 | 軽井沢町一円案内図 | 昭和6 (1931) ~8 (1933) 年 |
| 地図12 | 軽井沢別荘案内図 | 昭和8 (1933) 年 |
| 地図13 | MAP OF KARUIZAWA | 昭和9・10 (1934・1935) 年 (推定) |
| 地図14 | 保健之聖地 大軽井沢交通図 | 昭和16 (1941) 年 |
| 地図15 | 軽井沢町・小藤町 | 昭和17 (1942) 年 |
| 地図16 | 軽井沢別荘案内図 | 昭和10 (1935) ~16 (1941) 年 (推定) |
| 地図17 | 戦後の地図 | 昭和21 (1946) 年 |

「新軽井沢」,「南軽井沢」一帯を指している。これらの地域を描いた古地図として今回入手できたものは17種である。発行年代別にその内訳を見れば、明治期の発行と考えられるものが3枚、同様に大正期のものが4枚、昭和初期のものが9枚、終戦直後のものが1枚である。それらをまとめたものが表2-1である。以下、各地図の発行年などの概要を簡単に記す。

◇地図1：「信州軽井沢之全景」

今回入手した古地図で最も古いものである。「明治三十四年九月七日発行」とあり1901 (明治34) 年発行であることが判る。発行元は東京浅草茅町の精行社で、英語の解説があることから外国人向けのもと考えられる。大半の別荘には東西南北の地域毎の別荘番号が記されている。これらの番号は1911 (明治44) 年まで使用されていた²⁴⁾。なお、地図上から確認できる別荘番号をもとにすれば別荘の数は57棟である。

◇地図2：「長野県信濃国軽井沢郵便局市内 郵便 区画図」

中島松樹編『軽井沢避暑地100年』(国書刊行会 1987年) 掲載地図。軽井沢の別荘番号は、軽井沢郵便局が二等郵便局になったとき、それまでの東西南北毎の番号から全体を通し番号へと変更された。この地図はその通し番号を用いており、1911 (明治44) 年のものという²⁵⁾。

◇地図3：「軽井沢別荘分布図」

りんどう文庫²⁶⁾ 所蔵の地図。後に加筆された「軽井沢別荘分布図 明治44年」のメモがあり、これに従えば1911 (明治44) 年発行と考えられる。この地図には旧別荘番号とともに通し番号による新しい別荘番号が併記されており、別荘番号の変更時期に描かれたものと考えられる。このことから、1911年前後のものである事はほぼ間違いない。

◇地図4：「軽井沢別荘地案内図」

1917 (大正6) 年8月号の住宅専門雑誌『住宅』に掲載されている手書きの地図。野沢原の道路と日本人の別荘の位置が記されている。住宅専門雑誌『住宅』は野沢組とタイアップして軽井沢開発の一翼を担った「あめりか屋」の店主橋口が会主として興した住宅改良会の機関誌

であり、その内容は信憑性が高いと考えられる。雑誌発行時期から1917 (大正6) 年の地図といえる。

◇地図5：「軽井沢別荘案内図」

『軽井沢物語』(宮原安春 講談社 1991年) に添付された地図。「1922年版 (東京 神田 三秀舎印行) を参考」の記述から1922 (大正11) 年の地図と考えられる。

◇地図6：「軽井沢別荘案内図」

軽井沢町立図書館所蔵資料。「全体は大正10年頃のもの」とのメモ書きがある。描かれている道路や別荘番号は地図5と極めて類似し、同時期のものであるといえる。

◇地図7：「軽井沢地図」

大妻技芸学校・大妻高等女学校が震災後の校舎復興資金を調達するために興した別荘地分譲計画のために作成された地図。裏面に「大正15年1月」とある。ただ、実際はその計画は頓挫しており²⁷⁾、内容的には実現しなかった計画も描かれている。

◇地図8：「MAP OF KARUIZAWA」

りんどう文庫所蔵地図。年代不詳。記載が英語であり外国人用の地図と考えられる。1929 (昭和4) 年に開削された碓氷新道の南側の道路が破線で描かれており、1929年直前頃のものと考えられる。

◇地図9：「軽井沢ナショナルトラスト」所蔵地図

軽井沢ナショナルトラスト所蔵資料²⁸⁾。「昭和4年版」とのメモ書きがある。建物名称に英文も添えられていることから外国人も対象としていた地図である。

◇地図10：「軽井沢地図」1/6000

りんどう文庫所蔵地図。欄外に「1930.6」とあることから、1930 (昭和5) 年の地図と考えられる。

◇地図11：「軽井沢町一円案内図」1/15000

りんどう文庫所蔵地図。年代不詳。南軽井沢地区に描かれている「軽井沢競馬場」の完成が1931 (昭和6) 年7月、また、1933 (昭和8) 年7月に開設した三笠ホテル近くの別荘地前田郷が描かれていないことから、この間の地図と考えられる。

◇地図12：「軽井沢別荘案内図」

中島松樹編『軽井沢避暑地100年』掲載地図。「軽井沢町郵便局基調 昭和8年4月1日」とあり、1933 (昭和8) 年の地図である。描かれている内容は地図11とほぼ同じ。

◇地図13：「MAP OF KARUIZAWA」

りんどう文庫所蔵地図。年代不詳。地図8と同様に記載が英語であり外国人用の地図と考えられる。地図12とほぼ同じ内容であるが、1933 (昭和8) 年7月開設された前田郷が描かれており、その後のものであることは明らかである。

◇地図14：「保健之聖地 大軽井沢交通図」

中島松樹編『軽井沢避暑地100年』掲載地図。「昭和16年7月1日発行」とあり、1941年の地図である。発行所は方英社。なお、南軽井沢、千ヶ瀧地区まで描かれている。

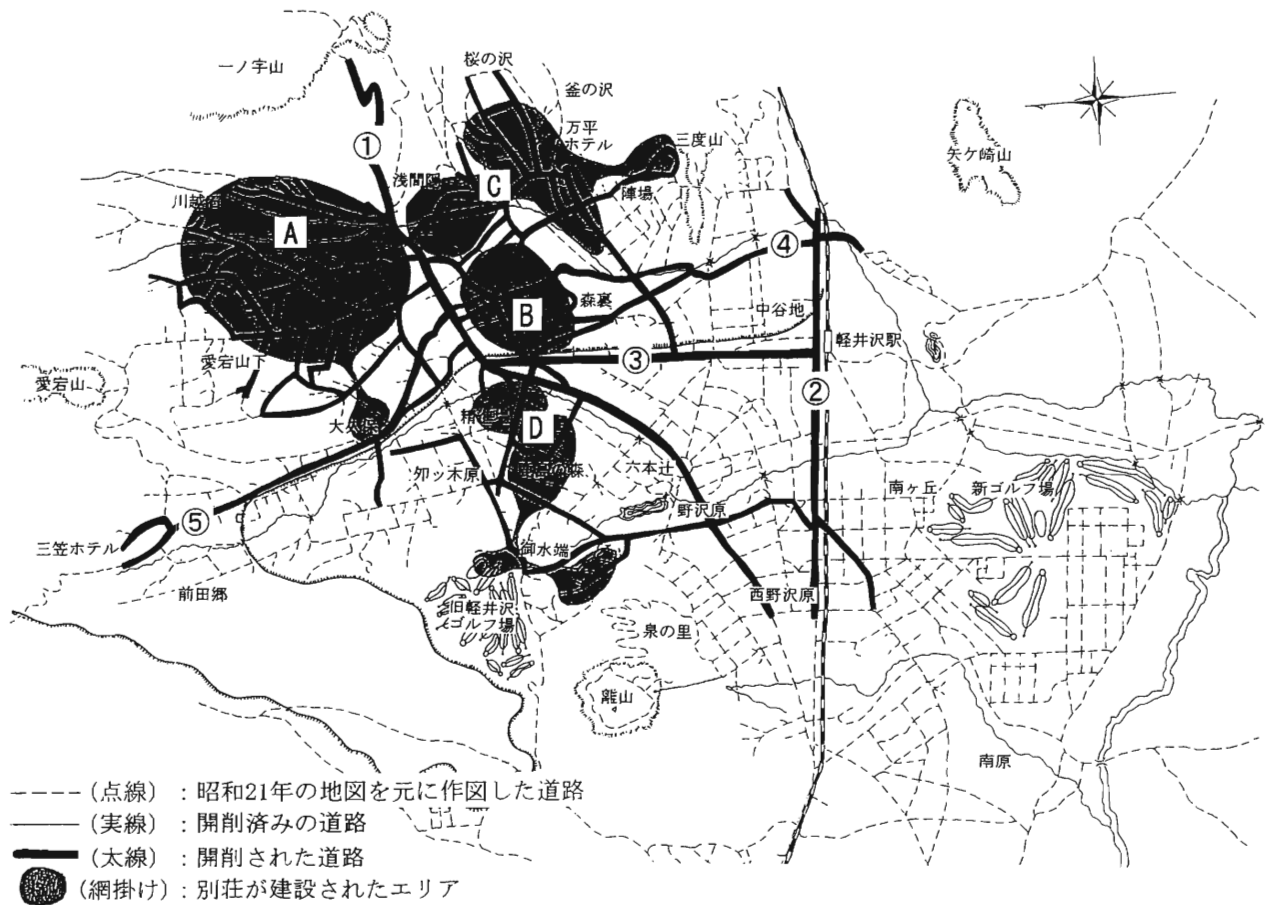


図2-1 第1期：1886（明治19）年～1915（大正4）年の開発の様子を示した地図

◇地図15：「軽井沢町・小諸町」

中島松樹編『軽井沢避暑地100年』掲載地図。「昭和17年5月25日発行」とあり、1942年の地図である。発行社は東京交通社。地図14同様に南軽井沢、千ヶ瀧地区さらには小諸町まで描かれている。

◇地図16：「軽井沢別荘案内図」

りんどう文庫所蔵地図。年代不詳。「昭和一八年頃」のメモ書きがあるが、地図14に描かれている軽井沢駅前の道路がないため、1941（昭和16）年以前のものであるといえる。おそらく、地図13の後の1935（昭和10）年から1941（昭和16）年の間のものと思われる。

◇地図17：「戦後の地図」

軽井沢町立図書館所蔵地図。地図のタイトルがなく、年代も不詳。メモ書きとして「戦後直後 昭和21年」とあり、戦後直後のものと考えられる。すべて英語で記されており、外国人向けのものであるといえる。

2.2 旧軽井沢地区の開発の経緯

これまで知られている軽井沢の開発史を踏まえながら、今回収集した各地図に描かれている道路と別荘番号を指標に戦前期までの面的開発の様子を整理すると、およそ三期に分類できると考えられる。すなわち、

- 第1期は1886（明治19）年から1915（大正4）年
- 第2期は1916（大正5）年から1929（昭和4）年

第3期が1930（昭和5）年から1945（戦前）年

である。第1期は外国人の別荘地として自然発生的に別荘が増加していた時期である。これに対し、第2期は日本人の別荘地として企業が中心となって開発に乗り出した時期である。第3期は軽井沢駅を挟んで南側に別荘地が拡大していった時期である。以下、各時期の道路の開削状況の様子をもとに当時の別荘地としての開発の状況を見てみたい。

2.2.1 第1期（1886年～1915年）

避暑地としての軽井沢の発見は、1886（明治19）年にA.C.ショーが旧中山道沿いに建つ旅籠を改築した家に住んだことに始まるとされている²⁰⁾。この頃の軽井沢までの交通機関は徒歩しかなかったものの、1887年に碓氷馬車鉄道会社が設立され、横川・軽井沢間を馬車が通り、また、官営鉄道線として1893（明治26）年に中山道幹線碓氷線が開通し、官営高崎・直江津間が全通し、一応の整備が終わった。

この第1期の道路ならびに別荘の建設状況を示す地図は、1901年の地図1と1911年の地図2・3の3枚ある。図2-1は戦後の1946（昭和21）年当時の状況を示した地図を下図とし、その上にこの第1期の段階で開削されていたと考えられる道路を示したものである。地図2・3を見ると、2本線と1本線によって描かれた道路がある。図2-1

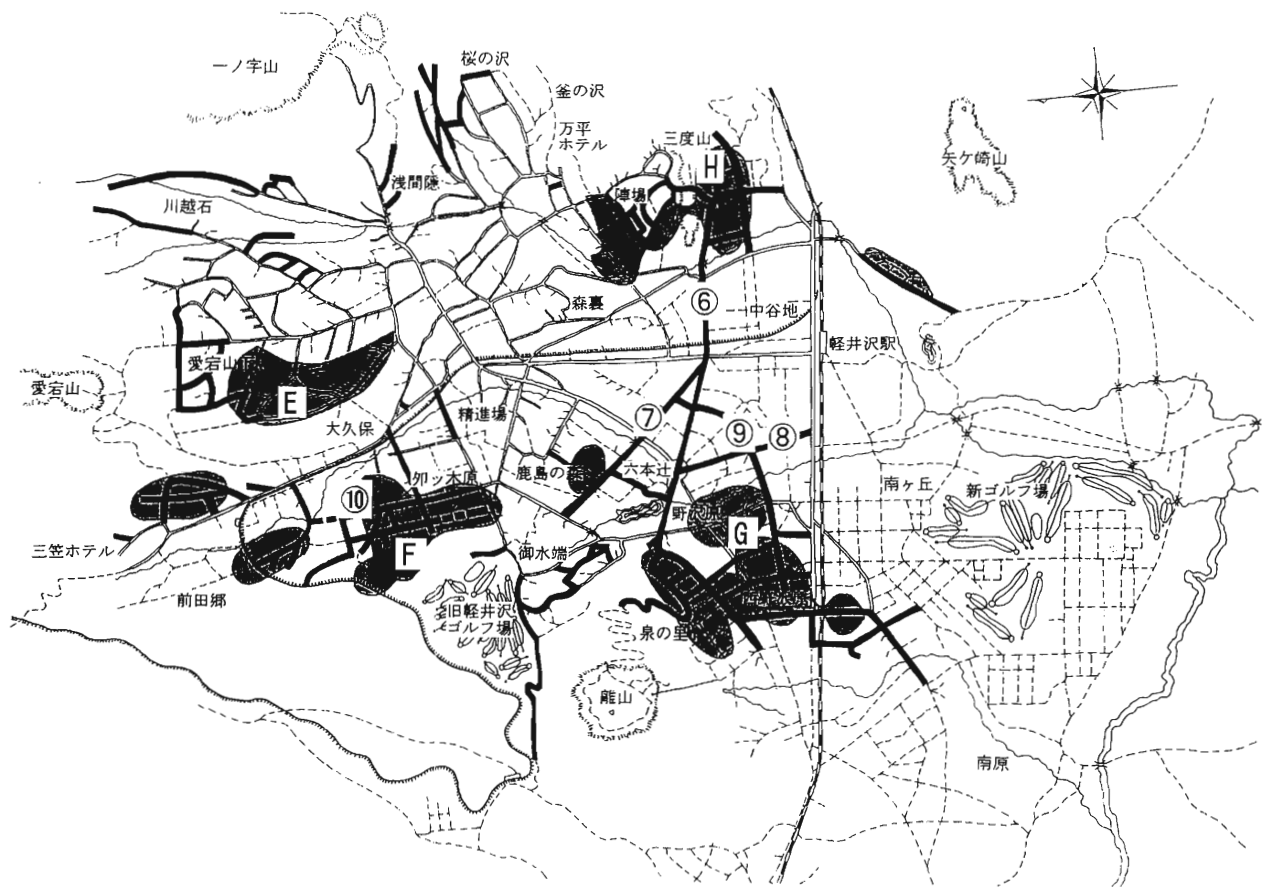


図2-3 第2期（前期）：1916（大正5）年～1925（大正末期）年の開発の様子を示した地図

の①～⑤は地図2で2本線で描かれていた道路であり、1911年段階での主要な道路であったと考えられる。①は旧中山道、②は碓氷線に平行に走る道路で1884年に開通した碓氷新道（現国道18号線）¹⁰⁾、そして、③は軽井沢駅から北に旧中山道と交叉するように伸びている道路である。④は東側において③にほぼ平行に走る道路で旧中山道から碓氷新道を経て南に延びている。⑤は旧中山道から北の三笠ホテルへと続く道路である。これらのうち、②③はその直線的形状から計画的に設けられた道路、他は自然発生的な道路であったと推察できる。

また、1本線で描かれた道路を見ると、旧中山道を挟んだ愛宕山と三度山の間に多く見られ、東北寄りの旧中

山道を挟んだ南北一帯、とりわけ南側では万平ホテルの周辺である釜の沢、北側の桜の沢周辺、北側では愛宕山下方面に道路が発達していたことが判る。また、旧中山道西側の旧ゴルフ場一帯にも道路が確認できる。この西側は明治初期の土地の払い下げによりプランテーション開発が行われた地区¹¹⁾で、道路はそのような事業の実施の中で開削されたと考えられる。

次に、この時期の別荘の建設場所を見ていくと、大きくA・B・C・Dに分布している。すなわち、Aは旧中山道の北側、Bは旧中山道の南側、CはBの東側に位置し、Dは西側一帯にある。ちなみに、A・B・Cの旧中山道沿い一帯には外人の別荘が多く見られた。ショーの別荘もこの地域に設けられ、彼の紹介によって外人が近くに別荘を構えるといった中で外人別荘が一帯に広がったと推察される。また、旧中山道沿いには商店などもあり日常生活の食料などを購入するにも便利であったこと、レクリエーション施設としてテニスコートなどがB地区に設けられたことなども外人別荘集中の1つの力となったと考えられる。なお、D地区は日本のプランテーション開発が行われた地域で、これらの一部には鹿島岩蔵が1899（明治32）年に6棟の別荘を建てている¹²⁾。現在の「鹿島の森」の始まりである。また、西寄りの北側には三井三郎助が1900（明治33）年に別荘を造り¹³⁾、また、敷地の一部に別荘を建て1906年には日本女子大に寄贈して三泉

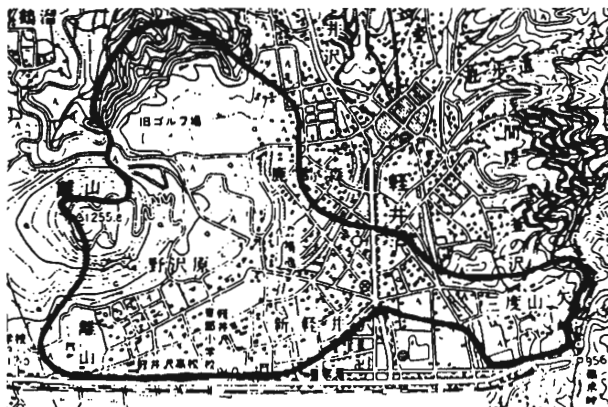


図2-2 野沢組所有と考えられる地域

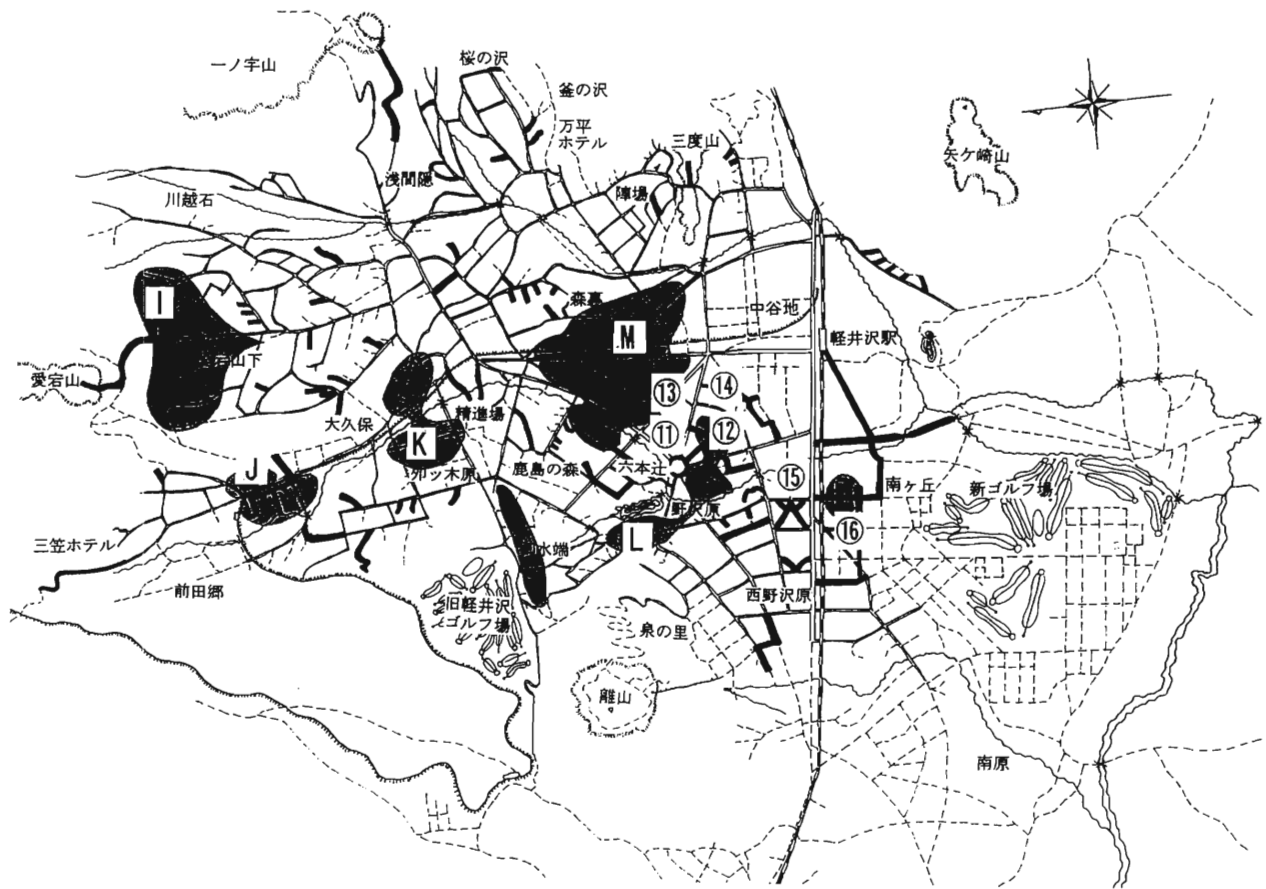


図2-4 第2期（後期）：1925（大正末期）年～1929（昭和4）年の開発の様子を示した地図

寮となるなど、外人別荘群とは離れたところに日本人の別荘が建てられていたといえる。

以上、地図をもとに道路と別荘の様子を見てみると、道路は②③の直線状の主要道路を除けば、総て江戸以来の道路をもとに自然発生的に開削されたものと推察される。また、別荘の建設地をみていくと、道路が開削された地域に重なるように別荘の存在が確認できる。このことから、道路の開削と別荘の建設は連動した動きとして捉えられることが判る。いずれにしても、第1期は日本人の別荘地として発展する前段階として、外国人主体の別荘地が旧軽井沢宿のあった地域を中心としてその両側に自然発生的に発展していた時期といえ、その様子が道路の形状等から窺える。

2.2.2 第2期（1916年～1929年）

この時期は、これまでの自然発生的な別荘地としての発展に対し、企業が別荘地経営事業として計画的に開発を行った時期といえる。すなわち、よく知られているように1915（大正4）年、貿易商の野沢源次郎が川田龍吉の所有していた離山周辺約200万坪を入手し、道路整備にあたった。野沢組の所有していた地域を記す資料は乏しく、現在確認できるものは図2-2である²¹⁴⁾。これによれば、その地域は碓氷新道を堺に軽井沢駅周辺を除く北側で、西側は離山山頂から旧ゴルフ場を含み、東側は

三度山までという広大なものである。ただ、最も北寄り部分はもう少し東側まで野沢組の所有地であったと考えられる²¹⁵⁾。いずれにしても、第1期では、道路があまり敷かれていなかった雲場の池をほぼ中心とした西側全面が野沢組の所有地であったのである。

さて、この第2期の道路ならびに別荘の建設状況を示す地図としては、地図4・5・6・7・8・9の6枚である。これらの地図から得られた道路の開削状況ならびに別荘の建設地を見ていくと、この時期に開削された道路の位置はほぼ野沢組の所有地に重なることが判る。すなわち、この野沢組の開発を裏付けるように、1917（大正6）年の地図では早くも野沢原の中心部に位置する六本辻となる直線的な道路が敷かれるなど、極めて計画的な道路の開削状況を窺い知ることができる。そして、この道路の開削の様子を見ていくと、この第2期は1925（大正末期）頃を堺に1916（大正5）年から1925（大正末期）年、1925（大正末期）年から1929（昭和4）年までの前期と後期に区分されるといえる。すなわち、前期では、別荘地の骨格となる主要道路が敷かれ、後期はそれらの主要道路の間の細かな道路の整備が行われたといえるのである。この様子を示したのが図2-3と図2-4である。図2-3を詳しく見ていくと、⑥は碓氷新道にほぼ平行に東西に横断する道路で六本辻の一本となるもの、⑦は③と⑥の交差点からさらに北西に延びる道路であり、⑧は六本辻から

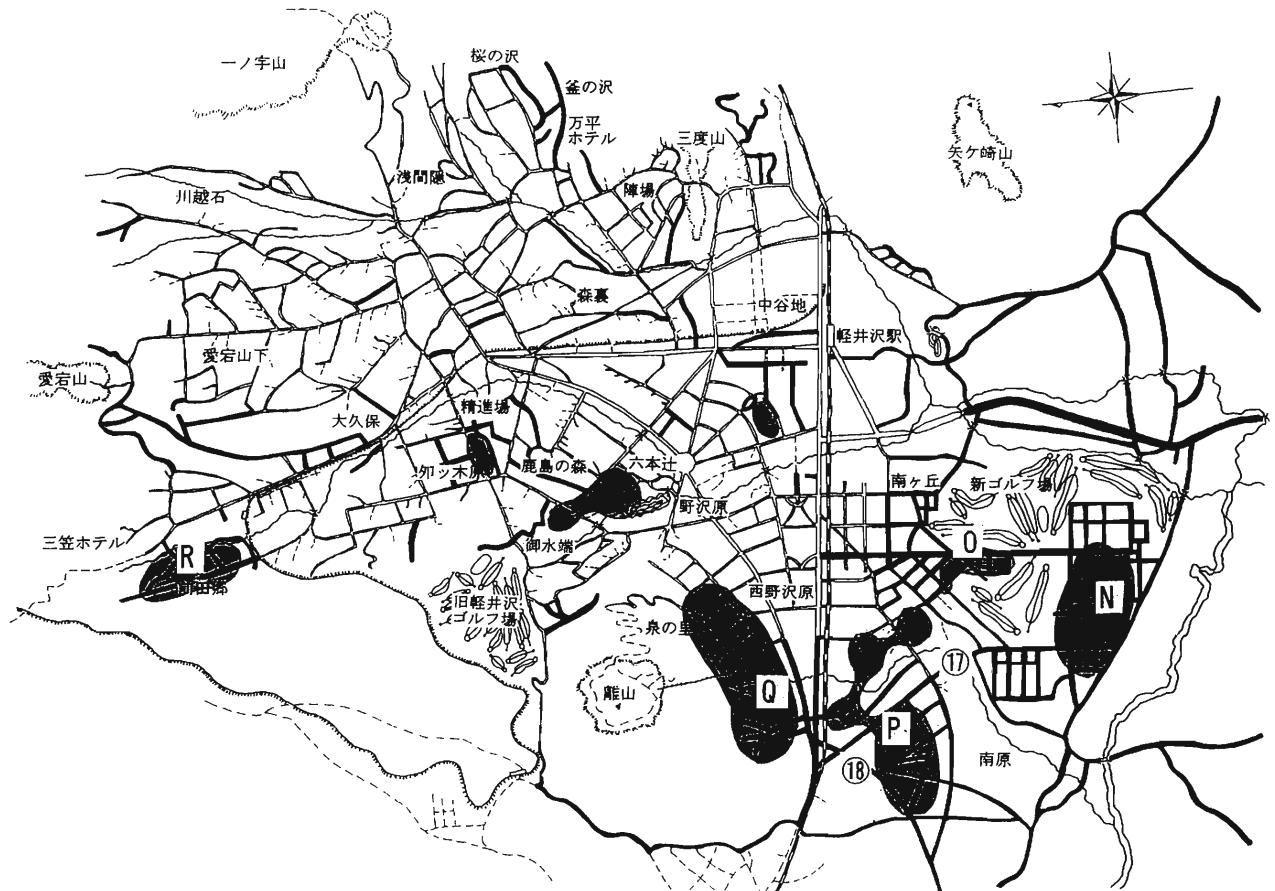


図2-5 第3期：1930（昭和5）年～1945（戦前）年の開発の様子を示した地図

南下して②の碓氷新道まで伸びている。加えて、⑨は六本辻を中心とした同心円状の道路で⑥と⑧を繋ぎ、そのまま西へ伸びている。また、⑩は旧ゴルフ場の東側一帯に敷かれた格子状の道路である。このように第2期前期では第1期の道路を基にして、それらを有機的に繋ぐように直線的な道路を配置したといえる。とりわけ、六本辻は野沢組の所有地の中心的な場所であり、その中心性を表現すべく放射状の道路が計画されたと推定される。一方、第2期後期の様子を描いた図2-4をみると、前期に敷かれた道路⑥～⑩の間をより細かく繋ぐための短い道路が沢山敷かれていたことが判る。そして、⑪の六本辻のロータリーができ、また、⑫の六本辻を構成する最後の道路、ならびに、⑬⑭のロータリーを中心とした同心円状の道路、さらには⑮などの幾何学的な道路が姿を現している。また、⑯のように碓氷新道を隔てた南側にまで格子状の幾何学的な道路が確認され、別荘地が駅南側にまで拡大され始めていた様子が窺える。

この時期の別荘の建設地は、前期では北側では愛宕山の真南地区（E）、旧ゴルフ場の東側一帯（F）、離山の南東地区一帯（G）、そして、東側では三度山周辺（H）へと広がっている。このうち、F・G・Hは新しい道路の開削された地区であるが、E地区は既に道路の造られていた地区である。また、後期の別荘建設地であるI・J・K・L・Mはこの時期に開削された短い道路部分によく重な

っている。ただ、前期のE、後期のIは共に愛宕山の麓に広がった別荘地といえる。これらの地区は第1期の別荘地に連続した地域であることから、第1期に生まれた別荘地の発展の様子を示すものといえ、野沢組が開発を行っていた地域以外のところも確実に別荘地として発展していた様子が窺える。

2.2.3 第3期（1930～1945）

第3期の道路ならびに別荘の建設状況を示す地図としては、地図10～16までの7枚である。これらの地図から得られた道路の開削状況ならびに別荘の建設地を記したのが図2-5である。これを見ると、この時期は軽井沢開発が完全に駅を挟んで南側に移ったことがよく判る。この南側の開発を促した要因の1つは「財団法人軽井沢南ヶ丘会」の設立にあった。すなわち、新ゴルフ場を開設するため1930年に雨宮プランテーション跡地49万坪及びその接続地を含め約56万8千坪を買い取り、新ゴルフ場分を除いた約21万8千坪を別荘地として分譲したのである²¹⁶⁾。新ゴルフ場は1933（昭和8）年に完成したが、それに先立ち南側一帯は格子状の道路整備が行われたのである。なお、この新ゴルフ場の南側の⑰⑱の道路の開削された周辺は、新ゴルフ場の敷地ではなく、1933年に開設される「友だちの村」²¹⁷⁾の敷地である。

この時期の主な別荘建設地はN・O・P・Q・Rで、N・O

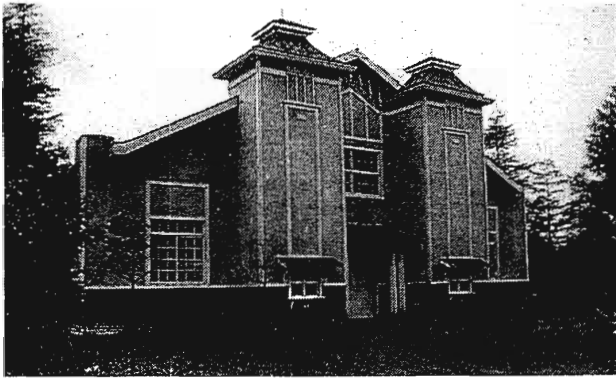


写真3-1 軽井沢通俗夏期大学講堂外観



図3-1 旧徳川慶久別邸立面図

は新ゴルフ場の分譲地，Pは1933年開設の友だちの村である。そして，Qは政友村，Rは前田郷である。政友村も前田郷も共に1933年に開設された別荘地であり，鉄道を挟んだ北側一帯では別荘地が中心部から離れた周辺へと広がり，また，南側でもゴルフ場を囲んで別荘地が広がっている様子が窺える¹⁸⁾。

以上，ここでは軽井沢の別荘地としての面的な変容の様子を3つの期間に区分して見てきた。そして，これらの段階的な変化の中で，第2期が人為的な計画の導入により大きく変貌した時期であることが明らかになったといえる。その変貌の様子は，別荘建築の建設地の面的な広がりだけではなく建物そのものに洋風別荘の出現という形で現れたといえる。次にその様子を見ておきたい。

3.別荘地開発と洋風建築の導入

3.1 野沢組の軽井沢開発

野沢組は，明治初期に創設された貿易会社で，2代目社長野沢源次郎は軽井沢での病氣静養を契機に軽井沢開発へと進んでいく。野沢は1915（大正4）年8月，川田龍吉所有地およそ200万坪を譲り受け，以後，軽井沢の別荘地開発事業を展開した。既に見たように第2期に行われた計画的な別荘地開発を展開したのはこの野沢組であり，最初に区画整理を行い，次に道路を開削したのであった¹⁹⁾。この野沢組の事業は大規模なものであったが，同社の社史では軽井沢開発事業に関してはまったく触れられておらず，その詳細は明らかではない²⁰⁾。ただ，当時の雑誌によれば，その道路の開削の様子は次のように述べられている²¹⁾。

「現停車場を中心として放射状の大道路を開鑿せんとした，該道路は四間幅を最上とし三間幅二間幅等の各等差を附し現に徳川公，大隈侯，細川侯等の別邸にそえる四間道路は道路の両側に落葉松，白樺などの道路樹を植えて防風日防け美観等を兼ねしめ路上は又一面に浅間バラストを以て覆われたる為如何なる暴風にも砂塵を揚げず又如何なる豪雨にも泥濘とならず自動車にても馬車にても自由に往還し得る如き理想的の交通網を造ったのである。

幹道に沿える別荘地には一丁乃至二丁毎に井戸を開鑿し飲料及び用水に不便ならしめた」

ここに見るように，野沢組では別荘地の整備として道路と井戸の開削を最初に行ったのである。とりわけ，道路は当初は軽井沢駅を基点とした放射状の道路を構想していたようで，その名残が，現在でも見られる駅から真北に伸びる道路の途中にある道路⑥⑦との交差点であり，その交差点から放射状に道路が展開していることであろう。加えて，六本辻のロータリーを中心に放射状道路が見られ，このロータリーはこの地区をそれまでの別荘地の中心であった旧軽井沢宿に代わる新しい別荘地の中心とすべく計画されたようにも推察されるのである。このことは，野沢組によりロータリーの近くに開設されたマーケットが，「軽井沢の中央部に洋風のマーケットを新設し（アンダーラインは筆者）」たと当時の雑誌に紹介されていることから窺えよう²²⁾。

さて，このマーケットは，1917年の竣工でその詳細は明らかではないが正面にツインの塔屋状の張り出しを設け，中央の屋根を一段高くしてその脇から採光を取るといふもので，外観は下見板張りの木造洋風の建築である²³⁾。このマーケットに見るように野沢組では別荘地としての環境を整えるために様々な施設を計画し，雲場の池一帯に遊園地を設けたり，旧ゴルフ場の開設にあたっては所有地の提供をおこなった²⁴⁾。また，建物としては下見板張りの洋風住宅を治安維持のため野沢原に警察官舎として建て1916年に寄贈している²⁵⁾。また，1918年には軽井沢通俗夏期大学として講堂と寄宿舎を建築して無償提供している²⁶⁾。この講堂（写真3-1）も詳細は明らかではないが，正面にツインの塔屋のあるマーケットに共通した構成の木造洋風建築である。このように野沢組の開発に伴う建築施設を見ていくと，すべて洋風の建築が建てられていることが判る。当時，三笠ホテルや万平ホテル，さらには，郵便局など明治後期から洋風建築が建てられ始めていたが，その流れを受け継ぐように新しい別荘地として洋風建築の導入が積極的に行われたといえる。道路の開削にあたっての放射状道路の導入も西欧的な街づくりを意識していたといえ，野沢組によ

表3-1 軽井沢におけるあめりか屋の建築作品リスト

| 建設年 | 名称 | | 外観の特徴 | 現存 |
|--------|-----------------|------|-------------------------------|----|
| 1916 | 旧志賀矢一別荘 | 個人別荘 | 木造2階建、1・2階外壁：下見板 | × |
| 1916 | 旧細川護立別邸 | 〃 | 2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | × |
| 1916 | 旧徳川慶久別邸 | 〃 | 2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | ○ |
| 1916か? | 旧小池張造別邸 | 〃 | 2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | × |
| 1916 | 旧桜井忠養別邸 | 〃 | 木造2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | ○ |
| 1917 | 旧大隈重信別邸 | 〃 | 2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | × |
| 1917 | 旧加藤高明別邸 | 〃 | 2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | × |
| 1917 | 旧田邊元三郎別邸 | 〃 | 2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | ○ |
| 1918か? | 旧津承昭別荘（神言会修道会） | 〃 | 2階建、1階外壁：シングル、2階外壁：スタッコ | ○ |
| 1918か? | 旧根津嘉一郎別荘 | 〃 | 2階建、1階外壁：下見板・一部シングル、2階外壁：スタッコ | × |
| 1920か? | 旧徳川圀順別荘 | 〃 | 2階建、1・2外壁：下見板、軒裏ブラケット付 | ○ |
| 1916 | 野沢組所有貸別荘・平屋 | 貸別荘 | 平屋建、外壁：下見板 | × |
| 1916 | 野沢組所有貸別荘・2階建 | 〃 | 2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | × |
| 1918 | 旧近衛文麿別邸（市村記念館） | 分譲別荘 | 2階建、1・2階外壁：下見板 | ○ |
| 1916 | 軽井沢 あめりか屋建築部出張所 | その他 | 2階建、1階外壁：下見板、2階外壁：スタッコ | × |
| 1916 | 旧軽井沢警察官舎（原文兵衛） | 〃 | 木造2階建、1階腰下見板・上部スタッコ | ○ |
| 1917 | マーケット | 〃 | 平屋建、外壁：下見板 | × |
| 1918 | 軽井沢通俗夏期大学講堂 | 〃 | 2階建、1階腰：下見板・上部モルタル、2階外壁：モルタル | × |
| 1918 | 〃 寄宿舎 | 〃 | 2階建、1・2階外壁：下見板 | × |

る新しい別荘地においては「洋風」が強く意識されていたといえる。

3.2 あめりか屋の軽井沢進出とその作品

野沢組はこの一連の洋風建築を建設するにあたって、当時アメリカ式建築の専門として売り出し中のあめりか屋とタイアップし、様々な施設だけではなく別荘建築としても洋風の建築を盛んに建設していた。この様子は具体的に当時の雑誌で以下のように紹介されている²⁷⁾。

「別荘の建築に際しては外観に於てはよく浅間高原の自然と調和し内容に於ては和洋建築の長所と粋とを集め趣味の上からも実用の上からも近代生活の諸条件に適するようあめりか屋の特殊なる設計施工を用いて昨年春以来徳川公、細川、大隈両侯を初め朝野諸名流の別荘一般貸別荘等数十戸の建築を完成した」

これによれば、野沢組の分譲地の別荘建築では、外観は自然との調和を重視し、また、内部においては近代的生活に適するように和洋の長所と趣味を考えているという（図3-1）。言い換えれば、外観はアメリカ式で、内部には床座とイス座の部屋を組み合わせた洋風色の濃い洋風別荘を積極的に建設しようとしていたのである。ちなみに、池田稔（東京帝大・明治35年卒・農商務省技師）は別荘建築としては洋風建築が相応しいとし、特にペランダを配したアメリカンバンガローやコテージがよく、また、色彩の施された洋風建築は大自然と調和してよいと述べている²⁸⁾。色彩面から言えば、日本の伝統的建築が自然と同化することを特徴としていたのに対し、洋風は自然とは異なる色を巧みに用いて調和させることを特徴としていたと考えられる。池田はそのような洋風建築のあり方こそ、別荘建築にふさわしいと考えていたのである。このように当時の別荘建築に関する意見の中に

は、池田のように洋風建築を積極的に求める気運があり、そのような中で軽井沢の洋風別荘が建設されていたと考えられるのである。

あめりか屋は大正5年には軽井沢に出張所を設け、別荘建築の設計施工にあっている²⁹⁾。ただ、大正10年以降、あめりか屋による別荘建築の紹介が雑誌『住宅』誌上では確認できないため、短期間であめりか屋は軽井沢の事業から撤退していたと推察される³⁰⁾。

さて、あめりか屋の軽井沢における作品をまとめたのが表3-1である。短期間ながらも数十棟の作品を残しているし、野沢組の貸別荘も手掛けており数としては多数建設していたと考えられる。各作品の外壁の仕様は極めて共通し、多くは二階建てで一階は下見板張り、二階はスタッコ塗りという明治末期から大正中期頃まであめりか屋が積極的に用いていたものであった。これは、あめりか屋の橋口がアメリカから持ち帰った輸入住宅を祖型とするもので、様式はバンガロー式である。軽井沢におけるあめりか屋の作品は、いわゆる注文による個人別荘と野沢組の行っていた貸別荘、そして、施設建築に大別される。これらの作品の大半は当然ながら野沢原一帯に建設されており、とりわけ規模の大きな徳川別邸・細川別邸・大隈別邸といった個人別荘はこの地域のランドマークや洋風別荘のモデルとしての意味を持ち合わせていたといえるであろう。

4. もうひとつの洋風建築の導入：ヴォーリズの軽井沢進出とその軌跡

4.1 ヴォーリズと軽井沢

軽井沢の洋風別荘の担い手として忘れてはならないのがヴォーリズである。ヴォーリズはあめりか屋とは異なり、宣教師建築家として、すなわち第1期の別荘地開発

表4-1 軽井沢におけるW.M.ヴォーリスの建築作品リスト

| 建築年 | 名称 | 外観の特徴 |
|-------|----------------|-----------------------|
| 1915 | 近江ミッション軽井沢事務所 | 出桁方杖 外壁真壁 |
| 1915 | カウフマン・コテージ | 出桁方杖 外壁下見板 |
| 1916 | パミリー・コテージ | 出桁方杖 外壁真壁 |
| 1916 | モーガー・コテージ | 外壁押縁板壁 テラス |
| 1917 | アームストロング・コテージ | 外壁押縁板壁 テラス |
| 1918 | 西邑山荘 | 外壁下見板 |
| 1920 | ヴォーリス・コテージ | 外壁押縁板壁 |
| 1920 | アンドリュース・コテージ | 外壁下見板張 |
| 1930 | 朝吹山荘(鳩睡荘) | 外壁面付板張壁 テラス |
| 1930頃 | 近江兄弟社山荘 | 外壁押縁板壁 |
| 1932 | ハミルトン・コテージ | 外壁押縁板壁 テラス |
| 1932 | 近藤山荘 | 外壁押縁板壁 テラス |
| 1934 | 御木本コテージ | 外壁面下見板張 テラス |
| 1934 | アーチャー・コテージ | 外壁下見板 テラス |
| 1936 | 川崎山荘(ドリーマーハウス) | 外壁化粧板張 テラス |
| 1936 | ベリック・コテージ | シャーレイ・スタイル 外壁化粧板張 |
| 1938 | 砂田山荘 | 外壁下見板張 テラス |
| 1940 | 三井高維山荘 | シャーレイ・スタイル 外壁化粧板張 テラス |

を担った外国人用の別荘の設計者として軽井沢に進出してきたといえる。このこともあって、ヴォーリスの手掛けた別荘建築の多くは、あめりか屋の別荘建築と比べると純粋な洋風の建物というよりは外壁が真壁や押縁板壁など日本の伝統建築のような印象を持つ質素な建築を手掛けていたといえる。また、それらの建設地も第1期の旧軽井沢宿を中心とする旧中山道を挟んだ東南と東北地区が多かったのである。以下、このようなヴォーリスの作品について概観したい。

このウィリアム・メレル・ヴォーリス²³¹⁾は、1905(明治38)年に来日し、2年後、近江ミッション(後の近江兄弟社)を起こし、建築の設計活動を始めている。なかでも宣教師達と交流をもっていたヴォーリスは、建築家として教会堂やミッションに関係する建築設計の仕事の伸ばし、やがて1920年にヴォーリス建築事務所を開設し、ミッションスクールの建築や住宅を中心に多くの設計を行った。

このヴォーリスは来日の年の夏、友人の宣教師に案内されて軽井沢を訪れ、1912年(明治45)年に近江ミッション軽井沢事務所を設け、やがて数棟の山荘を構えて、夏期を通して数名のスタッフとともに滞在し、ここを近江八幡と並ぶ拠点とした。軽井沢でのヴォーリスは、高原の自然を愛し、逗留者との交流を楽しむ日常が、在日宣教師会議や軽井沢会での活動につながっていたようだ。ヴォーリスにとっての軽井沢について満喜子夫人が次のように記している。

「軽井沢は彼にとっては、働くにも遊ぶにも神に聞くにも、最もよい土地でありました。高原の空気は肉体に、ビタミン的効果をもたらしたばかりでなく、彼には精神強壮剤でもあったのです。それは彼の少年時代の思い出、いな、むしろ少年時代に印象づけられた潜在意識的なものであると思います。」²³²⁾

ヴォーリスの建築記録としてまとめられている戦前期

における軽井沢の建築は1915年に町の本通に建てられた近江ミッションの建物を最初のものとして、以後の様々な山荘を含めて約60棟余りを数えている。そのなかでヴォーリスの活動は避暑地軽井沢の形成に寄与した軽井沢避暑団、および軽井沢会の活動にも関わり、建築施設の大半の設計が託されることになる。ここでは、これまで断片的に記録されていたヴォーリスの建築についての概要と現地調査で明らかとなったヴォーリス夫妻のコテージについて述べる。

4.2 軽井沢会の建築と軽井沢ユニオン教会

快適なる避暑地の環境維持発展を目的に、ジョン・ロビンソンら宣教師が中心となり1916年に財団法人軽井沢避暑団Karuizawa Summer Residents Association(以下、避暑団と略記す)が組織されている。その避暑団には明治中期に始まっていたテニスコートの施設が寄付され、さらに診療所を開設するなど、種々の施設を整えていった。一方、小坂順造ら日本人有志により、1922年に軽井沢集會堂が設立され、翌年学校が開かれている。この両者は1941年に合同し、財団法人軽井沢会となり、その活動は今日に及んでいる。

ヴォーリスはいつの頃からか、この避暑団員となり、1929年と1940年には理事長を務めるなど活躍し²³³⁾、建築施設の大半の設計を行った。以下、ヴォーリスの設計資料をもとに、それらの建築とその概要を列記する。

・軽井沢サナトリウム(マンロー病院) 1924年

避暑団の創立間もなく開かれた診療所(ナーシングホーム)より発展し、1925年に開院されたのが軽井沢サナトリウムで、マンロー院長に因んでマンロー病院と呼ばれたものである。建築は1924年に設計され後藤工務所の工事で1925年6月に竣工している。1942年マンロー医師の没後、加藤伝三郎が継ぎ、1966年町立軽井沢病院の開院によって役目を終えた。その後建築は軽井沢ヴィラとし

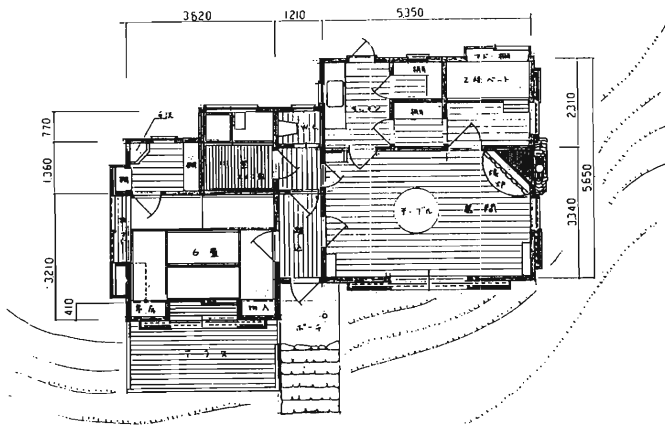


図4-1 旧ヴォーリスコテージ平面図



写真4-1 旧ヴォーリスコテージ外観

て活用されたが1995年に解体されている。本建築は避暑団初期の主要施設の一つでありヴォーリスの建築としても注目すべきものがあり、その内容は当初の図面と解体時の調査によって記録されている^(註34)。

・軽井沢事務所 1927年

軽井沢会テニスコートに隣接してあり、現在階下はクラブハウスに活用されているため改築されているものの、深い軒を方杖で支える構造を特色とし、1915年に建てられた近江ミッションの軽井沢事務所に先行例があり、つづくテニスコート・クラブハウスにも活用されている。

・軽井沢避暑団テニスコート・クラブハウス 1935年

1930、1935年の2期にわたって建築されたもので、浅間噴火石の基礎、出桁で張り出した2階、軒桁方杖を用いて軒を深くした切妻屋根、丸太造りの板張りによる下層外壁、そして白壁部分に筋交いを表したハーフティンバー風の表現など当地でのヴォーリスの建築の特色を示す建築として知られている。

・軽井沢集会堂 1926年

ユニオン教会が宣教師を中心とした集会場となっていたのに対し、小坂順造ら日本人有志は1922年、軽井沢集会堂を設立し、1926年にこの建築を建てている。米国式木造下見板張りで、弁柄の防腐塗装された外壁など、軽井沢サナトリウムの建築に通じるものがある一方、入母屋破風など和風要素も備えている。避暑団に1941年合同して軽井沢会集会堂となり現在に至る。1995年に建替えられているが、外観は復元されている。

・軽井沢ユニオン教会 1918年

超教派のユニオン教会は、1897(明治30)年にカナダメソジストの宣教師、ノルマン、バルコムらによって開かれている。現在の会堂は1918年、ヴォーリスの設計によるもので礼拝のほか音楽会、集会などにも盛んに活用されオーデトリウムと呼ばれていたものだった。外壁は初期の山荘にみる押縁下見板張りの簡素なものであるが、丸太材によるトラス小屋組みで大きな空間を構成している。詳しい来歴を含めて今後の調査の必要な歴史的

建築である。

4.3 山荘建築

軽井沢の別荘はショウ・ハウスを第一号として、大正初期すでに2~3百棟を数えていた。そして昭和初期には7、8百棟。千棟を越えたのは1936(昭和11)年頃であるといわれている。そのなかにあつてヴォーリスの作品として40棟余りの山荘の設計記録^(註35)がある。これらのうち、表4-1の18棟の内容が現在ほぼ明らかとなっている。それらのなかでは睡鳩荘、ドーミーハウスなど比較的規模の大きな数棟の山荘が、際立った意匠でこれまでも軽井沢における秀でた山荘建築として知られている一方、簡潔な設計をもとに地場の大工の手によって建てられたとみられる日本風の印象さえ抱く外観の山荘も少なくなく、軽井沢に広く普及していたコテージ・スタイルの一群に連なるものとなっていたこともヴォーリスの建築活動の特色とみられるのである。ここでは小規模山荘の典型として調査したヴォーリス夫妻のコテージについて紹介したい。

・ヴォーリス・コテージ 1920年^(註36)

ヴォーリスは大正初期より浅間隠しと呼ばれる地域(別荘番号1200~1300)に広大な土地を得て近江ミッションのコテージを建て、一種のコンパウンドをなしていた。その一角に1920年、夫妻のためのコテージを建てている。『九尺二間』と称されたこの山荘は図のように実際にはおよそ3間四方で、5坪ほどの広間を中心にして、その北に2段ベッドを備えた1坪大の寝室と、同じく1坪大の台所、そして西側に1坪小のバスルームとポーチを付した約10坪の山荘であり、小山を背にした緩い斜面に建っている様子が赤い鳥小屋のように見えたという最小サイズのコテージであった(図4-1、写真4-1)。なお、図4-1は、現状の実測により作成した平面図である。6帖間部分は後の増築である。この当初の設計意図に関してヴォーリスは「簡単な別荘の設計とその生活」^(註37)と題した小論のなかで次のように記している。

「……大きな家より便利な家を、見せびらかすような

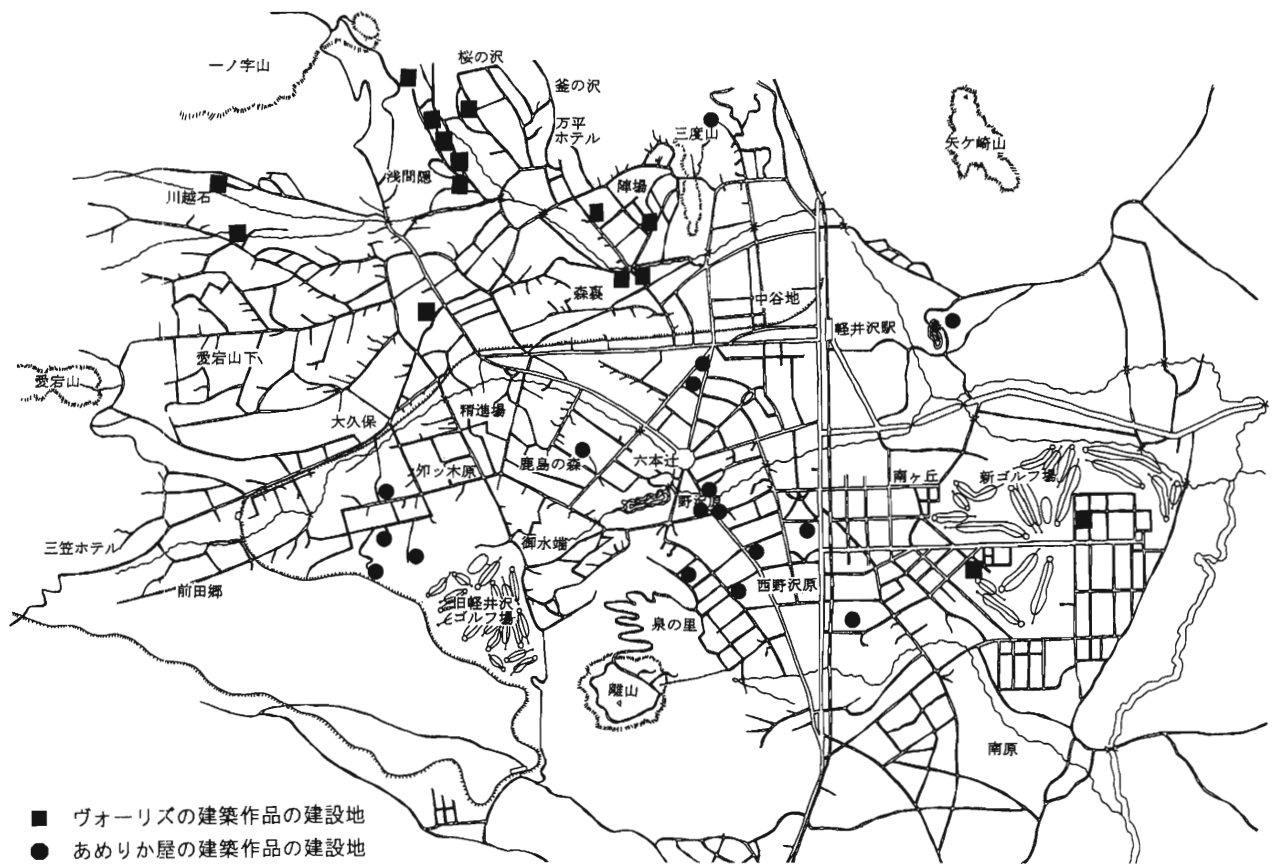


図5-1 あめりか屋とヴォーリスの建築作品の建設地

建物より簡素な家を第1条件とせねばならぬと叫びました。…(ここでの生活は)日常の環境から完全に变化した生活をなして、疲れた体と心を新鮮にし、また休息をはかるためであって、静かに後にくる激務のために心身をよくするためです。…」

避暑保養という生活を目的とした簡素な山荘の最小限モデルをここに示したものであり、この10坪の山荘より様々な成長する平面プランの作例が、ここに合わせて提案されていたのであり、実際軽井沢でこうした簡素なコテージが数多く建築されていたのである。

ところで「九尺二間の居間には暖炉、書棚、物入れ、クローゼットの設備、そして円卓や長椅子が配されており、食堂としても客間ともなるところであった。つまりヴォーリスはこのプライベート・コテージを住宅の最小限プランとして計画していたとみられ、この山荘プランは1924年に著わされた『吾家の設計』のなかでミニマムサイズの家として紹介されることになる。ヴォーリスは1920～30年代に多くの中小住宅を設計しているが、その住宅思想の1つの原点としこの山荘が位置づけられるのである。

5. 結びにかえて

本稿では古地図をもとに軽井沢の別荘地形成の過程は、第1期：外国人の別荘地として自然発生的に別荘地

が発展した時期、第2期：日本人の別荘地として企業が開発に乗り出した時期、第3期：開発の範囲が拡大化した時期、の3つの時期に区分されることを明らかにした。そして、第2期の野沢組主導による計画的な別荘地開発の中であめりか屋の手になる本格的な洋風建築が積極的に採用され、本格的な洋風別荘が日本人の別荘として建設され始めたこと、ならびに、この本格的な洋風別荘の動きと共に、ヴォーリスの手掛けた外国人の別荘建築にみるように洋風別荘ながら周囲の自然に同化するように質素で小規模の洋風別荘が求められるという二つの動きがあったことを指摘した。そして、また、図5-1に見るように、ヴォーリスの手掛けた地味で小規模の風別荘は最も古い旧軽井沢宿周辺に発達した別荘地に多く、一方、あめりか屋の手になる本格的な洋風別荘は野沢組の開発した別荘地に多く見られることから、軽井沢にける別荘地の形成過程と洋風別荘のあり方はお互い密接な関係が認められると考えられるのである。

ともあれ、今後、軽井沢の草創期の別荘建築は、その姿を消していく可能性が極めて高いといえる。その意味で、今後の重要な研究テーマとして、軽井沢の全域にわたる別荘建築の悉皆調査の必要性を指摘しておきたい。

<注>

- 1) 軽井沢の現存する別荘建築のリストとしてもっと新しいものに「日本近代建築総覧(新版)追補 長野県」(日本

- 建築学会編『建築雑誌』2000年3月)がある。
- 2) 近年、聞き取りなどをもとに精力的に軽井沢の歴史をまとめた成果の代表として宮原安春の『軽井沢物語』(講談社1991年)が挙げられる。
 - 3) これまでの研究でも地図を取り上げて当時の様子を論じたものはある。しかしながら、地図そのものを主資料として取り上げ、通時的に分析した研究はほとんど見られない。また、野沢組、あめりか屋、ヴォーリス建築事務所に関しては、全体の活動の一環として軽井沢の事跡が紹介されているに留まり、軽井沢の活動だけに注目してその意味や特徴をまとめた研究はほとんど見られない。
 - 4) 「明治の軽井沢絵図復刻」『信濃毎日新聞』1998年4月22日。
 - 5) 中島松樹編『軽井沢避暑地100年』p159 国書刊行会1987年
 - 6) 軽井沢研究で知られる大久保氏経営の古書店。今回の古地図収集にあたっては多くのご協力をいただいた。記して感謝したい。
 - 7) 穴戸 実『軽井沢別荘史』pp196-199 住まいの図書館出版局 1987年
 - 8) 中島松樹を会長とする会。この地図は、同会主催の軽井沢別荘見学会の際に配布された地図。
 - 9) 宮原安春『軽井沢物語』p61 講談社 1991年。なお、これによればショウーはその後の1888(明治21)年5月、大塚山に新しい別荘を設けたという。
 - 10) 島崎清編著『軽井沢百年の歩み』p13 1985年。これによれば工事竣工は1884年5月22日である。
 - 11) 同上p25。これによれば明治30年川田龍吉男爵が麓山下に農場を開設して牧畜、酪農に努めるが寒冷のため失敗に終わったという。なお、『郷の華 6』(pp207~217土屋長平 1985年)によれば、雲場の原一帯は川田龍吉の父が明治の初めに国から払い下げられて得た土地で、川田は御水端の付近に住まいを構えたという。また、『軽井沢別荘史』(pp132~133 注7参照)によれば旧ゴルフ場となった長尾原に旧小諸藩土稲垣正直が1882年に牧場経営を始めたという。そのようなプランテーション事業に伴って道路が開鑿されたと思われる。
 - 12) 注10参照p27
 - 13) これまで三井別邸は明治32年といわれていたが、昭和30年9月1日発行の『桜風新報第50号』に「三井館は上棟明治33年6月5日」と記されており、明治33年竣工と考えられる。
 - 14) 『私たちの軽井沢』p181 軽井沢町社会科副読本編集委員会 1996年。
 - 15) 旧ゴルフ場の東側から三笠ホテルまでの北に延びる道路の間に格子状の道路が設けられている。この地区には細川護立別邸、徳川慶久別邸、徳川圀順別邸、田辺元三郎別邸などあめりか屋の作品が集中して建てられている。これらの地区が計画的な直線道路が見られること、あめりか屋が野沢組とタイアップして軽井沢開発を行っていたこと、などを考え合わせれば、これらの地区も野沢組の所有地であったと考えるべきであろう。
 - 16) 『軽井沢ゴルフ倶楽部60年史』p35 軽井沢ゴルフ倶楽部1983年。
 - 17) 注10参照p61
 - 18) 同上
 - 19) 小林収『軽井沢開発ものがたり』pp62-65 信濃路 1973年。
 - 20) 野澤組百年史編集委員会『野澤組百年史』1981年。社史には軽井沢開発に関しては一切記されていない。ただ、2代目社長野澤源次郎の業績として簡単に軽井沢開発を行ったことと数枚の写真が掲載されている。
 - 21) 「理想的避暑地を造る為に」『住宅』pp23-24 大正6年8月号
 - 22) 橋口信助「避暑の新意義を説きて軽井沢の天地を推挙す」『住宅』p3 大正6年8月号
 - 23) このマーケットの設計施工はあめりか屋が行ったと考えられる。木造下見板、ペンキ塗りの開口部など雰囲気は当時のあめりか屋の作品と類似している。
 - 24) 21) 参照。遊園地に関しては「雲場川の流域を相して4一大水泳場及び冬季に於けるスケート場を造ること又雲場川左岸一帯の森林地帯を開拓して遊園地となす計画は現に着々として実行せられて居る」と記されている。
 - 25) 日本建築学会編『新版 日本近代建築総覧』p190 1994年。
 - 26) 土屋長平編『郷の華 3』pp171-172 1978年。これによれば、軽井沢夏期大学は開校が1918年で、講堂と寄宿舎はあめりか屋の設計、後藤良造請負であるという。建設地は、南原である。
 - 27) 21) 参照。
 - 28) 池田稔「涼しい別荘の造り方」『住宅』pp4-5 大正6年8月号
 - 29) 大正5年9月号『住宅』によれば、軽井沢出張所の開設について「本年徳川公、細川侯始め5戸の別荘を建設したるアメリカ屋は之を機として将来同地別荘建築の発展を計らんが為事務所の必要起り」と記されている。これから、あめりか屋の出張所開設は1916(大正5)年であることが判る。
 - 30) 雑誌『住宅』は、大正期にはあめりか屋の宣伝誌的側面を持っており、あめりか屋の作品の大半はこの雑誌で紹介された。また、撤退の理由は、地元の工務店である後藤工務所があめりか屋のスタイルを模倣して別荘造りを展開していたこととも関連していたと推察される。なお、橋口の「避暑の新意義を説きて軽井沢の天地を推挙す」『住宅』(大正6年8月号)には「徳川公細川大隈二侯以下諸名士の半永久的別荘住宅三十余戸を設計建設し」と軽井沢での活動を紹介している。
 - 31) 建築家ヴォーリスに関しては山形政昭『ヴォーリスの建築』創元社1989年などがある。
 - 32) 一柳満喜子「軽井沢のメレル」『湖畔の声』昭和38年2月号所収
 - 33) 『軽井沢会ハンドブック』
 - 34) 山形政昭「旧軽井沢サナトリウムの建築について」1996年
 - 35) 近江兄弟社に伝えられていた「建築設計リスト」を下に筆者らが整理した建築作品リスト
 - 36) 竣工後、昭和初期に一部が増築されている。その後近江兄弟社関係者の山荘となっていた時期を経て、1966(昭和41)年に浮田克躬が取得し浮田コテージとなり現在に至る。
 - 37) 『主婦の友』大正13年8月号所収